

『白い巨塔』と戦後復興から高度成長期の大阪の都市イメージ

橋 爪 節 也

はじめに―都市イメージを文芸作品に探る

天才的な外科医・財前五郎を主人公に、国立浪速大学医学部を舞台として『象牙の塔』での権力闘争と医師のモラルを問う山崎豊子（一九二四～二〇一三）の社会派小説『白い巨塔』は、昭和三十八年（一九六三）から昭和四十年（一九六五）に「サンデー毎日」に連載された。全国の大学や医師会をまきこんだ浪速大学医学部の教授選ではじまり、財前が執刀した佐々木庸平の誤診裁判の無罪判決で、助教授の里見脩二が退職願を出す場面で終わる。

しかし、「小説といえども、社会的反響を考えて、作者はもっと社会的責任をもった結末にすべきであった」という読者の声と、小説的生命のあり方を考えた山崎は、昭和四十二年（一九六七）から翌四十

三年に「続 白い巨塔」を執筆し、裁判や学術会議選挙に忙殺された財前の癌による死で小説を完結させた。現在は「白い巨塔」（全二十一章）と「続 白い巨塔」（十三章）を一つにまとめ、「白い巨塔」（全三十四章）の形で刊行される。作品テキストは註を参照されたい。

本稿では、社会問題や人間ドラマに踏み込んだ文学研究の視点ではなく、小説という架空の世界に、戦前のモダニズムをひきついだ形で戦後復興から高度成長期の大阪が表現されていることに注目する。

拙著『大大阪イメージ：増殖するマンモス／モダン都市の幻像』（創元社、二〇〇七年）で私は、大正十四年（一九二五）の第二次市域拡張で誕生した「大大阪」の都市イメージを、「GRATER OSAKA」という行政用語と一般に通行した「GREAT OSAKA」という言葉を比較したり、それが反映されたビジュアル、文芸作品、音楽はじめ様々

な領域にわたって検証した。「白い巨塔」に描かれた大阪も、山崎の徹底した取材とイマジネーションの広がりによって、虚構である文学空間のなかに、リアルな現実の都市と合致する形で立ち上げられている。

読者がこの小説を、現在進行形のドラマとして読んだことは、昭和四十年に完結した最初の「白い巨塔」のラストシーンで、里見が鶴飼医学部長に提出した「私儀、今般、感ずるところあり」ではじまる退職届けの日付が、連載期間中の「昭和三十九年十二月十七日」とあることで想像できる（三巻二一章三七七頁。引用は平成十四年版新潮文庫の巻数・章・頁で示す）。ほかに「昭和三十九年五月三十日」の『第一外科抄読会記録』に、前日に執刀された噴門癌手術への言及があること（五巻三二章二七五頁）、作中の「毎朝新聞」の記事に、佐々木は五月二十一日に入院、同月二十九日に手術し、六月二十一日に死亡と報じていることでも分かる（三巻一七章一三八頁）。

教授選は連載開始と同じ昭和三十八年の秋の出来事であり、手術は、新年度がはじまり、財前が教授に就いて日も浅い翌三十九年五月に執刀された。発売ごとに「サンデー毎日」を手にした読者にとって「白い巨塔」は、自分たちが働き、飲食し、眠るのと同じ時間を共有して進行する生々しい『同時代小説』であった。物語のなかの大阪もリアルな現実の街と重なって読み込まれただろう。

山崎豊子は大阪市東区（現・中央区）の昆布の老舗、小倉屋山本に生まれた。相愛高等学校（現・相愛中学校・高等学校）から京都女

子専門学校（現・京都女子大学）国文学科を経て、毎日新聞社に入社した。学芸副部長として在籍した井上靖の薫陶を受けながら小説執筆をはじめた。昭和三十二年（一九五七）に実家がモデルの『暖簾』でデビューし、翌年、『花のれん』で第三十九回直木賞を受賞する。初期は故郷の船場に密着した小説が多く、地域に密着したリアリズムを広い都市圏へ拡大したのが「白い巨塔」である。

「白い巨塔」は「どこまでも一つの人間ドラマ」⁽³⁾として書かれたが、大阪を中心とした近代都市文化に関心を抱く私にとって興味深いのが、住居を中心とした登場人物の設定である。「取材魔」「取材の鬼」であり「妙な調査癖」⁽⁴⁾があるとも語り、病院内の診察室や医局の配置を「大学病院における『建物に現われた権力主義』⁽⁵⁾というもの」（一卷一章八頁）と看破する山崎であるからこそ、登場人物の住まいの設定も綿密に練ったに違いない。山崎は、本作品の執筆時からプロットに関する「進行表」⁽⁵⁾も作るようになったという。

「白い巨塔」は、連載開始の昭和三十八年から続編完結の昭和四十九年までの大阪市と周辺の都市圏を描く。時代相でいえば、昭和三十九年の東京オリンピックから昭和四十五年の大阪万博を準備する間の、戦後復興から高度経済成長期に移行した大阪のイメージが、小説内の描写に色濃く反映されているのである。戦前、特に昭和十二年頃に一つの頂点に達したと目される「大大阪」の都市造りや価値観に対しての、戦後の新しい時代感覚との葛藤が、そこには見出せるかもしれない。

また表現論としては、『『白い巨塔』で、素材が文体を変えんことを初めて知ったわけだ』と山崎が述べ、新しい強靱な文体をこの作品で手にしたと評されていることも、注目すべきである。^⑥

「手術の場面なんかでね「メス！ コツフェル！ クーパー！」ならしいんですよ。「メスが鋭く光った」「赤い血が流れた」とか「淡黄色の臓器が現れた」なんて書くとおかしいんですよ。（中略）器具の名前、臓器の名前をぶつつ、ぶつつと並べるだけの方がリアリティがある。素材が大きくなると、形容詞なんかは拒否しちゃいますね。」（小説ほど面白いものはない）

医学用語を書き連ねることで、硬質なりアリティーに富んだ表現を獲得したとすれば、方向性は異なるが、読者が共感しやすい都市や住居の設定も、登場人物の属性としてキャラクターを彫琢し、強く印象づける要因となっただろう。

本稿では、山崎が登場人物たちを性格づけるために、病院や大学、住まいを、どのような地域や建物に設定したかに注目し、高度経済成長期にかけての大阪の都市イメージが、どう解釈され、作品に昇華されたか追跡する。最初に浪速大学を中心とした医療関係者に言及し、財前の愛人である花森ケイコの住まい、佐々木商店、料亭やバー、ホテル、コンサートホール、象徴的空間としての木津川河口については本誌次号に送ることとする。

一、「白い巨塔」の成立、並びにドラマ化

「白い巨塔」の構想を聞いた毎日新聞出版局長が執筆のための取材班結成を約束し、医学博士号をもつ「サンデー毎日」編集者を中心に、大阪毎日の社会部、学芸部も協力した。しかし、連載開始から国立浪速大学のモデルが大阪大学であることは容易に想像でき、東京大学とおぼしき東都大学や京都大学を連想させる洛北大学も登場する。大阪大学に「手厳しい取材拒否」をされたほか、多くの医療関係者が知識提供に非協力的であった。そうしたなか「続 白い巨塔」で財前勝訴を覆す医学知識が必要となり、困り果てた山崎は、東京の国立がんセンター総長の久留勝（一九〇二―一九七〇）に面会する。

久留は東京帝国大学の出身で、金沢医科大学を経て昭和二十九年（一九五四）に大阪大学の外科学教授となった。昭和三十二年に大阪大学が設置した癌研究施設の長を経て、国立がんセンターに招かれ、三代総長となった「阪大の連中が、うちがモデルだ、怪しからんと騒いで、文部省へ掲載取り消しに動いたのも、一理ある」と苦笑しながらも協力を快諾し、^⑧病理部長が患者側、外科医長が財前側という役割分担で模擬裁判的なやりとりを重ねたという。^⑨

小説が社会に与えた影響は大きく、早くに映画化やテレビドラマ化された。最初が昭和四十一年（一九六六）の大映映画「白い巨塔」で、山本薩夫監督、田宮二郎が財前五郎を演じた。「続 白い巨塔」が連載中で完結しておらず、映画は里見が浪速大学を去るところで終わ

る。翌年、佐藤慶の主演でテレビドラマ化もされた。

昭和五十三年（一九七八）、田宮二郎主演のテレビドラマが放送される。戦争の影も引きずる人間ドラマとして陰翳が深く、裏話では、田宮は山崎に財前役として自ら売り込む熱の入れようで、モーツァルト「レクイエム」が流れ、財前の遺体を安置室に見送るラストシーンでも、田宮本人がストレッチャーに横たわり、すすり泣く声が白布の下から聞こえたという^⑩。この田宮主演の時に新潮文庫の正統三冊本が刊行されている。なお原作は、財前の遺体の病理解剖に立ち会った里見の心にベーターベン「莊厳ミサ」が湧き上がったとする（五巻終章「三三章」四〇二頁）。

平成二年（一九九〇）に村上弘明の主演、二〇〇七年、韓国に舞台を移したテレビドラマがあり、平成十五年（二〇〇三）に唐沢寿明が財前を演じたドラマが放送された^⑪。唐沢主演時に題名を「白い巨塔」に統一した文庫版五冊本が刊行される。令和元年（二〇一九）には、テレビ朝日開局六〇周年記念として、設定を二〇一九年に置き換えて岡田准一が財前を演じ、同年、安藤慈朗が漫画化した『白い巨塔』（新潮社）も刊行された。

二、浪速大学医学部病院と堂島川

浪速大学医学部附属病院のモデルとなった大阪大学医学部附属病院

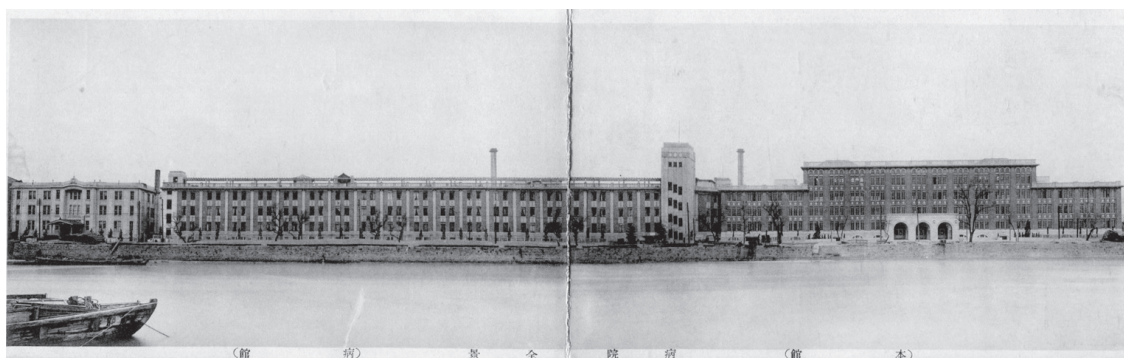


図1 中之島から眺めた旧大阪帝国大学附属病院。右が医院で左が病棟。当時の絵はがきから。

は、大正十三年（一九二四）に大阪市北区堂島浜通（現・福島区）に竣工した大阪医科大学附属医院が、昭和六年（一九三一）、大阪帝国大学医学部の発足で同学部附属医院となり、戦後さらに、大阪大学医学部附属病院（以下、阪大病院）となったものである（図1）。田箕橋を挟んで医学部のある中之島の対岸にあった。

阪大病院を舞台とした作品では、「白い巨塔」連載開始と同じ昭和三十八年、軟骨肉腫で若くして亡くなった大島みち子と河野實との文通をまとめた『愛と死をみつめて』（大和書房）が刊行され、翌昭和三十九年、日活が吉永小百合と浜田光夫の主演で映画化する。闘病記録のみならずメロドラマとしても観客の涙を誘い、映画には中之島界隈の風景も映し出された。純愛ドラマで注目された

同時期に、阪大病院は社会派小説の舞台となったのである。

「白い巨塔」の浪速大学医学部は、同じ堂島でも現実の阪大病院のあった西方ではなく、土佐堀川を隔てて大阪市庁舎と対面した現在の北区西天満に設定されている。

「鉄筋五階建ての建物の二階以上は、南に向ってテラスと大きな窓を持ち、窓の下には、堂島川が流れ、川を隔てた真向いに大阪市庁と、公会堂の青銅色のドームが聳え、街中というのに、時々、白い羽を持った鳩がドームの上に舞い降りている。それはもう二十年間数年間、毎日のように見馴れて来た退屈な景色であった。」（一卷一章九頁）

青銅色のドームは大正七年（一九一八）竣工の大阪市中央公会堂を指す。当時、市庁舎の対岸である北区絹笠町（現・西天満、積水化学工業の位置）には、高等裁判所の西側に大阪回生病院があった。同院は昭和四十一年（一九六六）、大淀区豊崎（現・北区）へ移転するが、浪速大学の位置は、回生病院のイメージも重なるかもしれない。

「敷地九千坪の浪速大学病院は、昭和四年から建っている大理石の太い柱頭を持った重々しい旧館に隣接して、五階建て、延一千五百坪の新館が増築されつつあるのだった。昨年の九月から工事にかかり、今年の九月に完成予定になっている。あと六ヵ月ほど

で完成の運びになっている建物は、五階建ての鉄骨に鉄筋が巻かれてコンクリートの打込みがはじまっている。」（一卷一章六頁）

戦前からの阪大病院を思わせる重厚な旧館に連なつて、工事中的の新館は「南側の一階の一番広いスペースと快適な場所を第一外科、その次が第二外科、その次が第一内科と第二内科、その次が産婦人科というような形」で入り、教授の政治力によって新館のどこに臨床十六科が入るかが決められた。暗い北側や西日の差す西側は、政治力の乏しい科にわりあてられた。山崎は、それを「大学病院における『建物に現れた権力主義』というもの」と呼び、

「その証拠に、現在、各科が入っている五階建て、延二千三百坪の旧館の場合でも、正面玄関に近い一階で、エレベーターと薬局にも近い最も便利なところを、浪速大学病院の表看板である第一外科が占居し、歯科、眼科、レントゲン科など、教授に政治力のない科は、正面玄関から遥かに離れた陰気くさい不便な部屋があらわれ」（一卷一章八頁）

とする。新館増設の費用は、鵜飼医学部長と、第一外科教授の東が協力して政府から二億五千万円の予算をとったものである（一卷四章二五一頁）。この国立大学病院の重厚さは、慶應義塾大学病院と目される私学の東京信濃町の東京K大学附属病院の「病院というよりマンモ

ス・マンシヨンのような雰囲気を持ち、(中略) 国立大学の附属病院とはかけ離れた明るさと贅沢さ」(四卷二五章一五六頁)とは対照的である。

そして、病院や隣接する裁判所の場面の合間に挿入されるシーンで印象的なのが、前を流れる堂島川の描写である。

「東はぶかりと葉巻の煙を吐き、窓の外へ眼を向けた。六月半ばの初夏の陽ざしが、堂島川に照りつけ、銀色の川面から光の矢を反射させていた。」(二卷四章二三九頁)や、病院の中庭での佃の「夏の太陽が芝生に照りつけ、花壇の花も萎えていたが、木陰にたつと、堂島川から吹き渡って来る風が意外なほど涼しかった。」(一巻四章二八〇頁)など、水都大阪らしいモチーフとして、季節の推移に触れながら堂島川は登場人物の心の動きにからんでくる。

新館は昭和三十八年九月に竣工し(二巻四章二四〇頁)、落成記念式で秋空に聳える新館を、川面は鏡のように映し出す。

「高く澄みきった空の下に、落成して間もない浪速大学附属病院の新館が、白い巨塔のような威容を堂島川に映し出している。つい一カ月前に完成し、文部大臣の臨席を得て盛大な落成記念式を終えたばかりであった。」(一巻七章三七九頁)

苦心の末に決まったタイトルの「白い巨塔」という言葉が、本文ではここに登場する。教授選挙は、この新しい建物三階の会議室で開かれ

た。午後三時からの決選投票で財前が教授に選ばれて落胆する東の眼に、川は暗く、非情なものに映る。

「東は、力なく椅子から立ち上り、窓の下を流れる堂島川に眼を向けた。夕闇の中で、堂島川の川面は凍るような冷たさで光り、緩慢な流れの中に一人の人間の心など押し流してしまうような暗い冷たさが波打ち、東の冷えきった心のうちを、そのまま映し出しているようであった。」(二巻二一章一八八頁)

誤診裁判でも堂島川は描かれる。「里見は会釈して、その前を通り過ぎ、乱れのない足で裁判所の正面階段を降り、外へ出た。すぐ前を流れる堂島川に、晩秋の翳りをもった午後の陽が静かに小波だっている。」(三巻一九章二八七頁)をはじめ、大阪地裁民事第六号法廷で「佐々木庸平の死に対する法律的責任を財前被告に認めることは出来ない」と判決が下されたときも、河畔が里見の心情を反映するように描写される。

「裁判所を出ると、里見は堂島川沿いの道をまっすぐ大学に向った。鈍色の冬の陽が川面を冷たく光らせ、川岸の葉を落した裸木は鋭い枝を広げている。里見は、引きずるような重い足どりで歩きながら、今あった判決を思い返した。」(三巻二一章三七頁)「白い巨塔」は、ある意味で大阪の河川に沿った物語でもある。次

号で述べる道頓堀川に面した「バー・アラジン」、教授選敗北の慰労会を東がもつ横堀川の料亭、財前の愛人ケイ子のマンションの前を流れる長堀川などの河川も登場する。堂島川の流れは、「K会館」「R会館」の前を流れて中之島の西端で土佐堀川と合流し、安治川と木津川に分かれて大阪湾に注いでいくが、木津川河口では、製鋼の焰をあげる製鉄所の凄惨な情景が、財前の闘争心を奮い立たせる心象風景に昇華されていく。

三、財前産婦人科医院と財前五郎郎

財前五郎の本姓は黒川で、母親の黒川きぬの住所は「岡山県和気郡伊里中」である。村の開業医・村井清恵の援助で大学に進み、「畳の破れたみすばらしい下宿に住み、駅前食堂で空腹を満たしていた」が（一卷第六章三三三頁）、村井と大阪医専の同窓であった産婦人科医である財前又一の娘・杏子と結婚して養子となった。三十五歳で助教授となり（以上一卷一章三一頁）、教授選では四十三歳であった（同前一二頁）。連載開始の昭和三十八年から逆算して大正九年（一九二〇）の生まれとなる。

又一の産婦人科医院は、大阪市北区の桜橋の近くにあった。和歌山市民病院に向向する無給助手の送別会が近くの「バー・ラディゲ」で開かれた帰り、外観が描写される。

「教室員たちと別れ、桜橋の交叉点のところまで来ると、財前は、そのまま、まっすぐ、阪急へ出て、家へ帰ろうか、それとも——と、迷った。

赤信号を待ち、二度目の青信号が出かった時、赤い大きなネオン・サインが財前の眼に映った。財前産婦人科医院——舅の財前又八の医院が、まるでキャバレーのように派手なネオン・サインを夜空に浮きたたせていた。」（一卷一章三六頁）

戦後のベビーブーム以来、産婦人科が賑わっていたのだろう。桜橋の交差点は、現在の大阪駅前第一ビルの南西で、南側は北新地の繁華街である。山崎豊子が勤めていた毎日新聞社は、すぐ南にあった。医院は堂島側にあったらしく、第二章で財前は又一の医院を訪れる。

「財前産婦人科医院の前まで来ると、何時も妙な活気に溢れている。

内科や外科と違って、妊産婦の多い産婦人科であるせいかもしれない。三階建て九十坪の医院の前は、何時もタクシーや乗用車が駐車し、みるからに財前産婦人科医院の人気を物語っている。」（一卷二章七一頁）

又一は「大声で喋っては、あっはっはっはっといふ笑」し、「とても

六十二歳などとは思えぬほど声に張りがあり、活気に満ちて」いる。後述の六十三歳で定年を迎える東とほぼ同世代である。「海坊主のようにぬるりとした頭」を光らせ、診察の合間を縫っては医師会役員として飛び回り、花街の小唄や長唄の会へは必ず顔を出し、付き合いもこなしながら「どこから、そんなエネルギーが湧くのかと、首をかしげたくするような精力的な活動であった」と財前があきれるほどである（一卷二章七二頁）。

三階建ての医院の背後に、十五坪ほどの庭を隔てて数寄屋風に造られた住まいがあり（同前七四頁）、奥座敷は、医局員の柳原と心齋橋の野田薬局の野田華子との見合いの席にも用いられた（四卷二六章三二〇頁）。

財前は患者に溢れた医院を見て、一日に五、六十人の外来患者があり、入院用のベッドも三十近くあるにもかかわらず病院にしないことを不思議がるが、又一は、保険の点数などをあげて医院である方が得策であることを「医は算術」と説明する。

そして、又一の遊び場であるとともに、教授選挙や医師会工作のための拠点とする料亭が、お初天神（大阪市北区曾根崎）に近い「扇屋」である。又一は財前と「扇屋」に向かう。

「当の又一は、患者と顔を合わさぬように裏口から外に出ると、すたすたと堂島中町から梅田新道の方へ向って歩いた。大島の対に白い足袋、皮鼻緒の畳表草履をはいて、懷手をしたまま歩いて

行く又一の姿は、およそ消毒くさい医者などとはかけ離れた、遊びを心得た商家の旦那衆のようないでたちであった。

梅田新道の交叉点を北へ渡り、お初天神の近くまで来ると、料亭の暖簾をくぐった。扇屋と小さく染め抜いた、こじんまりした構えの料亭であった。」（一卷二章七九頁）

女将の時江は四十歳前後で、北新地に出ていた芸者である。「大阪医専出身で、浪速大学の内輪のことをよく知らぬ」又一だが（一卷二章九二頁）、旧制医学専門学校は、旧制大学や医科大学と設置目的が異なり、臨床医の即時養成を主な目的とする。昭和二年に五年制では初の医学専門学校として大阪高等医学専門学校（大阪医科大学の源流）が発足した。「扇屋」で又一は五郎を激励する。

「ともかく、わしが見込んだあんたや、わしがなれなかった国立大学の教授に、何がなんでもなつてほしい、開業医というものは、どない患者が集まって、金が唸るほど出来ても、淋しいもんや、わしみたいに自ら大阪の町人医者と割り切つて、それに徹している者でも心淋しい、人間は金が出来たら、次に名誉が欲しい、人間究極の欲望は名誉や、名誉ができたなら自然に、金も人も随いて来るけど、金はどこまでもただの金に過ぎん、わしの出来なかった名誉欲を、女婿のあんたに是が非でも果して貰いたい、わしの金儲けはみんなそのためや」（同前八四頁）

この場面で描かれる又一の人間性が、いかにも大阪の町医者らしい。「ほんな、気分を変えて、ちよっと、地唄でも唄わして貰おうか、わしの十八番の『雪』といこか」とし、

「女将の弾く太棹の三味線に乗って、又一の声とは思えぬ渋味を持った声が、奥座敷に流れた。小唄や長唄のようにはれやかな情緒はなかったが、いぶし銀のように渋い艶やかさが地唄の節廻しの中にあつた。財前五郎は、始めて聞く地唄に耳を傾けながら、開業医として、多忙な診療をちゃんとすませ、その上で遊び、芸ごとをたしなみ、通人をもつて任じる又一の姿に、大阪という街にしかない強烈な個性を持った町医者の姿を見る思いがした。」
(同前八六頁)

「雪」は、上方落語「たちぎれ線香」でも知られる峰崎勾当作曲の名曲である。又一は云う

「どや、これが大阪の古い地唄というものや、あんたも、地唄は無理やろけど、小唄ぐらいは習うた方がええ、昔の大阪の町人医者と自称した医者は、みんなよう働き、よう遊ぶ通人ばかりで、妾宅から急患の往診に出かけるのはもちろんのこと、長唄でも、浄瑠璃でも、能でもみんな一流の芸人やった、中には道楽

凝って、ついに能楽研究家になってしまった医者もあるぐらいや、どうもこの頃の医者は、開業医でも、大学病院の教授でも、人間の器量が小そうて、野暮で面白味があらへん、あんたも、そんな面白味のない野暮医者にならんように何か一つ、道楽をしてみなはれ」(同前八六頁)

又一がいう能楽研究家になった医者とは、道修町(現大阪市中央区)の高安病院の高安六郎(一八七八―一九五九、号・吸江)などを想起させる。六郎は、劇作家の高安月郊の実弟で、代々の医者家に生まれて東京帝国大学に学び、京都医科大学で病理学を研究してドイツに留学する¹²⁾。帰国後、父の創立した高安病院の内科を担当した。戦前から郷土研究誌「上方」や大阪に関する諸書に寄稿し、俳句や能、文楽などに造詣が深く、昭和三十二年に自著『光悦の謡本』(松書房)を刊行している。

多趣味な又一であるから、大阪市北区医師会での鵜飼の講演後、新町(大阪市西区)の料亭「鶴の家」で接待したときに、鵜飼から趣味を訊かれ、「私は下手の横好きで、地唄から小唄、長唄、俳句、お茶と何でも、一通りは齧らんと気のすまん方ですてーそうそう、書画骨董も趣味のうちですか」として、巧みに付け届けの洋画に話を転じている(一巻三章二二五頁)。

一方、五郎の住まいは、十四年前、又一が娘夫婦の新居として西宮市夙川の山の手に新築した(二巻一章五二頁)。最寄りには阪急神戸線

の夙川駅である。教授選が行われる昭和三十八年から十四年前は、昭和二十四年であり、財前二十九歳の時である。戦後復興期であり、家の様子は同時代の他の住宅との比較が必要だが、敷地も広く、

「庭園燈に照らされた二百五十坪ほどの庭は、芝生と小さな花壇だけの手入れの行き届かない庭であったが、国立大学の助教授としては、贅沢な住いだった。」（一卷一章五一頁）

とされる。居間には床の間に、又一からもらった掛け軸や香炉があり、神代杉の座敷机があった（同前五五頁）。平和製薬取締役の武井は財前邸訪問時に「突然、お邪魔したのですが、なかなかいいお住まいですね」と褒め、「国立大学の少壮教授の住いにしては、整い過ぎている応接間」を見廻している（二巻一四章三三九頁）。

桜橋に医院兼自宅を構える又一にすれば、阪急沿線ではなく阪神沿線の方に娘夫婦の住まいがある方が便利だが、夙川を選んだのは杏子であり、又一は杏子について次のようにぼやく。

「あいつは、死んだ母親の方に似て、虚栄心が強うて、大阪の下町風より、芦屋や夙川方面の山の手風が好きで、ものの云い方も、大阪弁と東京弁のまじったけったいな氣どった標準語を遣いよって、一人娘やけど、わしにちっとも似てへん」（一卷二章八二頁）

杏子は浪速大学医学部教授の夫人会「くれない会」では、「阪神女子大」の出身で英語が堪能と紹介される（二巻十二章二一八、二一九頁）。

夙川は戦前から文化人などが住むモダンな地域であった。美術での象徴が、洋画家の大石輝一（二八九四―一九七二）が夙川河畔に設計・装飾した茶房「ラ・ポバーニ」だろう。大石は大阪に生まれ、佐藤春夫の勧めで上京して本郷洋画研究所に学んだ。関東大震災で帰阪後、大阪市美術協会展などで活躍する。「ラ・ポバーニ」はイタリア語で孔雀を意味し、昭和九年（一九三四）の開店から、阪神淡路大震災で解体されるまで建物が残っていた。

また、大正十三年（一九二四）に、夙川から苦楽園、甲陽園に至る現在の阪急甲陽線が開通する。甲陽園、苦楽園とともに高級住宅地として開発され、財界人や文化人が多く居住するが、戦前は、甲陽園に東亜キネマ甲陽撮影所が開かれたり、「つるや」「播半」など料理旅館が建ち並び、苦楽園も、ラジウム温泉苦楽園などの保養施設が賑わった。

財前は夙川の家に妻と、教授選のときに小学校三年生の長男・一夫、一年生の次男・富士夫の家族四人で暮らしている（二巻九章八八頁）。後半では、附属小学校の六年生と四年生になった子供たちが遠足や摩耶山へのドライブの話ではしゃぎ、「すべて財前の少年時代には味わうことの出来なかった団欒であった。」（四巻二四章一三二頁）

と語られるが、学術会議選では財前邸の応接間で白票に記入するた
め、「佃講師と安西医局長、選挙専従者になっている十人の医局員
が、ワイシャツの腕をまくり上げて、テーブルを囲ん」だ状態となり
(五卷三十一章一七二頁)、父に死なれ、母の内職と奨学金で大学進学
した財前がこの家で得た「団欒」は失われた。

四、里見脩二の公団アパートと兄・里見清一

財前と対照的な住まいが、誤診を巡って対立する第一内科の助教
授・里見脩二の住む大阪市東区法円坂(現・大阪市中央区)の公団ア
パートである。里見は財前と同期で、三十四歳で病理学教室から臨床
に転じ、鶏飼に第一内科の講師として迎えられ、四年目に助教授と
なった(一卷三章一一一頁)。財前と同一年とすれば教授選のときに
四十三歳である。

妻の三知代の父、羽田融は、名古屋大学医学部長で解剖学の権威で
ある。浪速大学の助教授から名古屋に移り(同前二〇一頁)、東の翌
年に退官する(二卷一二章二四六頁)。病理学教室での縁で里見は美
知代と結婚したのだろう。三知代と東の娘、佐枝子は「聖和女学院時
代の旧友」であった(一卷三章二〇一頁)。息子の好彦は昭和三十八
年で八歳の小学校二年生である(同前一一七頁と二〇八頁)。

山崎豊子の秘書、野上孝子は、記者時代の山崎が結核性肺浸潤で阪

大病院に入院し、主治医で次期教授と目された優秀な助教授が、業績
に対する教授の「尋常ならざる嫉妬心」によって九州の大学に移った
ことを体験したと伝える¹⁴。地方大学への転出を迫られる里見に、この
時の思いが投影されているのだろう。

里見の大病院からの帰宅の道筋だが「病院を出ると、里見は淀屋
橋から阿倍野行の市電に乗った。」「上本町一丁目の停留所で降り、二
百メートルほど西へ入って行くと、法円坂の住宅公団アパートの一群
が見えた。」(同前一一五頁)とある。上本町一丁目は、現在では上町
筋と長堀通りの交差点を指すが、昭和三十五年の『京阪神便覧 大阪
市区分地図帳』(昭文社)に確認すると、当時は上町筋と南久宝寺と
の交差点にあたり、市電停留所も、そこに上本町として記載されてい
る。交差点の西北角には、昭和十五年に建碑された「兵部大輔大村益
次郎卿殉難報國之碑」がある(図2)。今は「上町」交差点。

現在、淀屋橋から法円坂に行くならば地下鉄御堂筋線で本町に行
き、中央線に乗り換えて谷町四丁目駅で下車するが、中央線は、昭和
三十六年に大阪港から弁天町間、昭和三十九年に弁天町から本町まで
開通したものの、本町と谷町四丁目間の開通は、昭和四十四年であつ
た。「白い巨塔」執筆中は谷町四丁目駅は出来ていない。他に谷町線
も、東梅田から谷町四丁目間の開通は昭和四十二年であり、里見は淀
屋橋から北浜を経て天満橋から馬場町を抜け、天王寺方面に向かう市
電で通勤している。

まさにこの時期の大阪は、昭和四十五年の万博開催を睨んだ都市改



図2-1 上町の交差点。東南から西北をのぞむ。軽トラックが停車しているのが上町筋で、向こう側の角にあるのが大村益次郎の碑。右が現在のバス停。



図2-2 兵部大輔大村益次郎卿殉難報國之碑



図3 上町1丁目と法円坂公団アパート付近。

昭和35年（1960）の『京阪神便覧 大阪市区分地図帳』（昭文社）より作成。右端が法円坂公団アパート、中央下が上本町1丁目交差点。中央大通りは、上町筋西側まで立ち退きで拡張されているが、東側はまだ立ち退いていない。

- ① 法円坂公団アパート
- ② 上町筋の西側まで立ち退いた中央大通り。東側はまだ立ち退いていない。
- ③ 上町1丁目の交差点。現在大村益次郎の碑がある。

造のまっただなかであり、付近では、地下鉄建設と複合した形での中央大通り建設、船場センタービル建設の大工事が進められていた。「満員電車で揺られている里見は、電車に乗っている間だけは、研究のことを忘れ、放心したような涼しい眼を、窓の外に向けていた」（同前一一五頁）とあるが、馬場町と上町一丁目の電停の間で、中央大通り建設のため立ち退きで出来た広大な空き地を眺めながら市電に揺られていたことになる（図3）。

そして、実際の法円坂の公団アパートは、本文に記された停留所から西ではなく東側に建ち並んでいた。戦後の住宅不足のために大阪市が住宅協会を設立して建設し、東側に位置する昭和二十六年の一期（一号棟～八号棟）以降、昭和三十八年の七期（三十八号棟）まで建

設された。里見の部屋は「東棟四階の三二二号室」（一卷六章三三一頁）なので公団建設の最初期に入居したことになる。

前出『京阪神便覧 大阪市区分地図帳』では、法円坂住宅の付近は官庁関係の建物が多く、国立衛生試験所大阪支所があるのも里見が住む地域らしい。佐枝子が、本町から里見家を訪問するのが次の箇所である。

「上本町一丁目の停留所でバスを降りると、法円坂の公団アパートのある方へ足を向けた。（中略）」

舗装された道を二百メートルほど西へ行くと同じ形の建物に、同じ大きさの窓とベランダをつけたアパート群が見えた。その一

つ一つの建物に無神経な字体で番号が記され、疎らで貧弱な樹木と乾いた赤土が、それらの建物を取り囲み、殺風景な景色であった。」(一卷三章二〇〇頁)

佐枝子も停留所から現実の公団アパートとは反対へ歩いているが、小説執筆時からその場所には、旧大阪陸軍病院を前身に発足し、昭和二十二年(一九四七)に現在地(中央区法円坂)に移転した国立大阪病院(現・独立行政法人国立病院機構大阪医療センター)があった。「白い巨塔」での国立関西病院がそれに該当するだろう。「国立大学の教授の退官後の行き先」として、さらに「白い巨塔」は、東京では国立東京病院、大阪近辺では「国立関西病院、厚生年金病院、近畿労災病院の院長」をあげる(二巻十二章二二九頁)。国立関西病院は、大阪市立医科大学第二内科の角川教授が新院長の就任工作を進めていた(一卷三章二五五頁)。

また、停留所から現実の公団アパートがあった東方向に歩いても、当時の上本町一丁目の北東には大阪赤十字病院が実在した。天王寺区筆ヶ塚町に開院した同病院は、戦後、朝鮮戦争の陸軍病院として連合軍に接收され、昭和三十一年に本院が筆ヶ塚町に戻るまで上本町一丁目の旧陸軍施設に移転を余儀なくされた上、接收解除後も、昭和五十年まで精神神経科のみ法円坂分院として残されている。

里見の部屋は、狭い土間を入ると四畳半ほどの台所兼食堂で、次の六畳が居間、隣の南向きの六畳が里見の書斎である。

「南向きの六畳ほどの部屋の壁面には、処狭いばかりに書棚が置かれ、天井までぎっしりと医学書が積み上げられていた。その上、さらに置き場のない書籍がリング箱に入れられたまま、部屋の片隅に積まれ、古びた粗末な机が窓際に向って置かれていた。そこには、佐枝子の父の東貞蔵の書斎に見られる威圧するようなもののしさも、贅沢な書棚や書斎机もなかったが、清貧に甘んじながら、一途に学問を続けるつましい医学者のたたずまいがあった。」(一卷三章二〇二頁)

三知代は助教授の給料が五万六千円で、そのなかから住居費が七千円、月々の書籍費も二万円かかることを漏らす(一卷三章二〇三頁)。婿入りしなければ財前も同様の生活ぶりだったろう。¹⁵無給医局員の柳原の場合、他の病院の当直医のアルバイトが一晩三千円で、週二回、一ヶ月で二万四千円を稼がないと下宿代と生活費がもたなかった(四巻二二章二二頁)。

「法円坂の住宅公団アパートも、建築後十年近くになると、鉄筋コンクリートの壁に罅が入り、壁の色も薄汚れ、ところどころ塗り替えのあとが斑らな地図を描き、最初のような清潔感がなくなってきた。」(四巻二三章八五頁)

とあるほか、財前が訪問したときは、「八時を過ぎたばかりであったが、その辺一帯は殆ど人通りがなく、森閑と静まりかえり、四階建ての建物が両側から掩いかぶさるように地面に黯い影を落していた。」

（一卷六章三三〇頁）として寂しい住宅の様子が描かれる。

しかし、高度成長期らしい、活気あるアパートの日常生活も、何ヶ所かに記される。^⑬

「公団アパートの朝は、一日中で一番活気を帯びている。慌しい朝の食事、出勤前の小さな緊張感、職場や学校へ出かける扉の音、一戸、一戸でたてる勝手なものの音が一つの音響となって、アパートの朝を賑やかに活気づかせる。」（二巻二二章二四四頁）

「祭日の公団アパートは、朝からかけっ放しにしたテレビの音や、妻や子供たちを連れて、ドライブに出かけるマイカー族の車の音で騒がしい。」（五巻三〇章一一八頁）

柳原が里見家を訪れたときは、部屋の中に「質素な洋服箆筒と整理箆筒が並んだ壁際に、古びたステレオが置かれ」、小説最後の場面の「莊厳ミサ」の伏線か、指揮者の異なるベートーヴェンの「運命」のレコードが三枚あることに柳原は、いかにも里見らしいと感じる（五巻終章「三四章」三六二頁）。

里見のアパートと強く結びつくのが、その近くの内安堂寺町（現・大阪市中心区）で開業する十三歳年上（最初の登場時で五十六歳）の

兄の里見清一の医院である。国立洛北大学第二内科の講師であった清一は、主任教授と意見が合わずに大学を去った。

「里見のいる法円坂の公団アパートから、兄の家までは、歩いて二十分ほどの距離であった。戦災から焼け残った内安堂寺町の、ごたごたと家が建て込んでいる一角に、『内科、小児科、里見医院』と記した小さな看板がかかり、そこが里見のたった一人の兄である里見清一が開業している医院であった。」（一卷三章一一九頁）。

三巻で里見が訪問したとき、兄は法円坂の公団アパートへの往診で留守だった。

「停留所から歩いて十五分程の内安堂寺町通りの一角にある古びた医院が、里見の兄の家であった。ガラス扉を押すと、布張りの擦りきれた待合室の椅子に人影がなく、診察室へ入ると、兄の姿はなかったが、診察机の上に内科学会誌や研究所が積み上げられ、そこには、京都の国立洛北大学の第二内科を追われた後も、一人の町医者として清貧に甘んじ、節を守りながら、こつこつと研究を続けている兄のたたずまいがあった。」（三巻一九章二五三頁）

診察室は「八畳の日本間を板張り」にし、「縁が擦りきれかかっている診察台と、古びた机」があった（二巻三章一二〇頁）。地域医療に尽くす姿は、明治二十二年（一八八九）、内安堂寺町に近い谷町六丁目二七番地に「薄病院」を開業し、相撲界の後援者を指す「タニマチ」の語源になった薄恕一（一八六七～一九五六）を連想させる。恕一は、明治二十年に来阪して苦学の末、明治二十三年に谷町に開業した。さらに東京医科大学に学び、大阪府医師会会長や大阪府会議長もつとめた¹⁷。近くで生まれた作家の直木三十五も自叙伝「死までを語る」で恕一の援助に感謝を述べている¹⁸。

そして、この里見兄弟と同じ上町台地に病院を構えながらも、対照的な医者が鍋島外科病院の院長、鍋島貫治である。第一外科で財前の十年先輩であり、大阪市議員であり同窓会の顔役であった。「派手なストライプのダブルを、りゅうと着込み、口髭を生やした鍋島貫治は、どうみても五十過ぎの脂ぎった実業家というタイプであった」（一巻六章三三三頁）という。

鍋島外科病院での直腸癌手術の帰り、近くであることを思いだして財前が里見家に立ち寄る場面もあり（前出、同前三三〇頁）、鍋島と里見兄弟の生活空間の近さが示される。鍋島外科病院は次のように記される。

「上本町六丁目の交叉点を北へ折れ、電車通沿いから一丁程入ると、三階建て鉄筋コンクリートの鍋島外科病院が見えた。ベッド

数百二十の個人病院としては大規模な構えであった。」（同前三二二頁）

最初は住居のイメージが曖昧であったものが「続 白い巨塔」に移ると、物語の進行につれて所在地や室内が具体的に¹⁹なり、山崎が仮想の大阪地図を煮詰めていったことが分かる。四巻で柳原が行く「アルバイト先の個人病院」も、規模や心齋橋の喫茶店まで二〇分あれば行ける距離感から、鍋島の病院と思われる。

「外見はまがりなりにも鉄筋コンクリート三階建ての百ベットを持つ病院であったが、中の設備は旧態依然としたものばかりで、エックス線写真一つにしても、旧式の断層撮影機を使い、二人の当直医は、盲腸の急患から小児科、産婦人科まで受け持たされる。」（四巻二八章四五〇頁）

上本町付近は寺院が多く、空襲をまぬがれた戦前からの病院を相続したという設定かもしれない。設備の古さは、病院よりも議員活動を優先させるキャラクターが浮かんでくる。現実の上本町六丁目の北側は、明治二年（一八六九）に院長・緒方惟準、主席教授・ボードウィンで上本町四丁目に開院した浪華仮病院など、医学史に関する歴史的な地域であるが、鍋島外科病院のような大きな病院はなく、南東に大阪赤十字病院（天王寺区筆ヶ崎町）や、大正十二年に現在地に移転し

た聖バルナバ病院（天王寺区細工谷）がある。

五、浪速大学医学部教授たちの住まい

浪速大学医学部教授の住まいに触れると、まず歴代第一外科教授の東貞蔵と、助教授時代の東が仕えた名誉教授滝村恭輔の住宅は、財前の夙川に連なつて、芦屋川（東）、御影（滝村）のように阪急神戸線沿線に並んでいる。

（一）第一外科・東貞蔵邸（阪急・芦屋川駅、芦屋市）

弟子の財前と教授選で敵対する東貞蔵は、東京の東都大学医学部を卒業し、三十六歳で同大学医学部の助教授、四十六歳で浪速大学医学部教授となった（一卷一章一三頁）。浪速大学医学部教授の定年は六十三歳であり（同前一二頁）、昭和三十八年から計算すると東は、明治三十三年（一九〇〇）の生まれとなる。貞蔵の父の東一蔵は、外科の功労者で、四位勲二等勅任官の国立洛北大学附属病院院長をつとめた。一蔵は恩師の令嬢と結婚し、貞蔵の妻の政子も、東の祖母とも縁続きの著名な法医学者の娘である。東の長男で佐枝子の兄である東哲夫は、中国文学を専攻したかったが反対され、新潟医大に入学した年、戦時下の食糧不足も加わつて二十二歳で夭折した（以上一卷一章四八・四九頁）。政子の「実家も相当な資産家」とされる（一卷六章

三二八頁）。貞蔵が一蔵三十歳代の子供とすれば、一蔵も幕末から明治維新前後の生まれで、適塾の塾生たちの子供の世代に見立てることができるかもしれない。

娘の東佐枝子は、昭和三十八年に二十九歳なので（一卷一章四五・四六頁）、昭和九年（一九三四）の生まれとなる。阪急宝塚線の花屋敷に近い丘陵にある「聖和女学院」を卒業した。「赤い屋根と白い壁の瀟洒な建物」「ヨーロッパのカレッジのように美しい建物」があり、チャペルの鐘が鳴る（以上二巻一四章三九頁）。昭和二十三年に新制女子大学となった神戸女学院大学、戦前からの学校を母体に昭和二十五年、西宮に開設された聖和女子短期大学などを連想させる。

小説前半で東が帰宅するところに、その邸宅が登場する。

「芦屋川沿いに山手に向つて車を走らせ、夜更けの住宅街を通り抜け、イギリス風の煉瓦と白い壁に柱型を見せた家の前に停まると、東は、急にしゃんとした身構えと謹厳な表情をして、門のべルを押した。女中が勝手口から小走りに出て来、門を開いた。」（一卷一章四三頁）

イギリス風といえば、大正六年（一九一七）に英国人のコンドルが設計した古河邸（東京都北区）など、イギリス貴族の邸宅に倣った煉瓦造りを思い出す。「イギリス風の煉瓦と白い壁に柱型を見せた」とある柱型は、壁から浮き出して、建物の構造力学とは無関係に外観を

飾った装飾用の柱であるピラスター(plaster)である。「白い巨塔」で邸宅の外観に最も触れるのが東邸であり、山崎は「大阪格子」の語源を徹底して調べたように、建築用語の「柱型」を用いることで屋敷の格調と重厚さを印象づける。

建物は大きく、「門燈の明りの中でイギリス風の煉瓦と柱型を見せた壁面が、高く聳えたっていた」(一卷三章二二頁)とされ、門から玄関のあいだに敷石が敷き詰められて、「玄関のホールからすぐ二階の書斎の方へ続く階段」があり、玄関ホールの右側に応接にも用いる広い洋間があった。その部屋は、

「二十畳ほどの部屋の中央に、大きなマントル・ピースがあり、その上の飾棚には高価な置物が並べられ、壁には号何十万といわれる画家の絵が掲げられていた。その一つ一つが、非常に高価ないいものであるにもかかわらず、ひどく全体の調和が欠けているのは、それらが人からの贈り物であることを物語っているようであった。」(一卷一章四三頁)

とされ、高価な置物や絵画の配置に全体の調和が欠けているのが印象的である。マントルピースの前には主が坐る安楽椅子があり、壁には「高名な画家の風景画」や「黒い礼服に勲二等の勲章を胸に飾った日本の外科学界の功労者である東一蔵のいかめしい肖像写真」(同前五〇頁)が掛けられていた。東の後任候補であり、佐枝子との見合いの

意味もあつて菊川が訪問したときは、正式な晩餐がダイニングに用意された。

「東家のダイニング・ルームは、英国風のどっしりしたチークの飾り棚と食器棚に囲まれ、中央のテーブルの上には、洋蘭の盛花が飾られ、スエーデン刺繍のナプキンとディナー・セットが整えられていた。」(一卷六章三五七頁)

重厚なイギリス風の邸宅だが、東邸には「十畳と八畳の二間続きの座敷」もあり、正月には第一外科の教室員が集まり、財前を筆頭に講師、助手、副手たちが、床の間を背にした東の前に進み出て盃を戴いた。別室では、教室員の夫人たちが政子に挨拶をしている(一卷三章二〇五頁)。政子は華道・未生流の役員であり、和室は東家の日常生活に必要な空間だった。

二階の佐枝子の部屋も「東向きの八畳の日本間を居間にし、その続きの四畳半の間にベッドを置いて寝室」にしている(二巻二二章二二七頁)。佐枝子も和装が多く、「納戸色の紬の着物」(一卷一章四五頁)、「青磁色の上代紬の着物」(二巻六章三五九頁)、「藍大島の対」(三巻一九章二八七頁)、「藤色の小紋ぼかしの着物に臙脂の綴帯」(四巻二四章一〇九頁)、「青磁色の小紋の単衣に、錆朱の綴帯」(四巻二五章一七八頁)など、生活上、和室が必要だっただろう。これらの和服の色調は青色系で、清楚な印象を与える。

なお、戦前から流行した住宅様式ではアメリカの影響を受けたスパニッシュ様式も有名だが、東邸が南欧風の明るいスパニッシュ様式であったとしたら、佐枝子の性格も、もっと開放的に演出されたかもしれない。

芦屋での東邸の位置が分かるのが小説後半である。学術会議会員立候補の挨拶のため、御影の滝村邸を訪問後、財前が東邸を訪ねるところに、「御影駅から二つ目の芦屋へ向った。芦屋川駅で降り、川沿いの道を再び、山手に向って三丁ほど行ったところ」(四卷二五章二二頁)とある。東邸への道は「足もとに細流の音」が聞こえ、桜の並木があった(一卷三章二二〇頁)。財前の目に東邸は次のように映る。

「煉瓦と壁面に太い柱型を見せたイギリス風の邸の中は、どっしりとした重厚さが漂い、財前がいくら金をかけても築けない重々しさがあり、それは一代にして出来上るものではなく、代を重ねた学者の家にしか感じられない人を威圧するような格調の高さであった。」(四卷二五章二二二頁)

芦屋の住宅地化は、明治三十八年(一九〇五)に阪神電鉄が開通して阪神芦屋駅ができたことが始まりである。大正二年(一九一三)の国鉄芦屋駅の開設、大正九年(一九二〇)の阪急電車が開通して芦屋川駅が出来たことで加速化する。

興味深いのが、大阪帝国大学医学部の前身である大阪府立医科大学の初代学長、佐多愛彦(一八七一～一九五〇)である。山本ゆかりの指摘²⁾によると、医学者の立場から健康地として芦屋に着目した佐多は、阪神開通の翌明治三十九年(一九〇六)から大正八年(一九一九)にかけて、現在の山手町にあたる字山坂および字津谷に約二万坪の土地を購入して別荘を建てた。健康をキーワードに郊外生活をたえ、『市外居住の春々免』(阪神電気鉄道刊行、一九〇八年)に「都市と田園附市外生活の幸福」を著す。所有地は、デベロッパーであった阿部元太郎の要請を受けて、昭和三、四年に松風山荘住宅地として分譲された。

東邸は、芦屋川沿いとあることから、佐多の別荘があった山手町とは反対の西山町付近と思われるが、現在では高級住宅地として知られる芦屋ながら、一蔵が芦屋を選んだのは健康的な郊外生活を意識した医者の見識とも解釈できる。環境は快適で冷暖房も完備していた。設定温度が低い夏は、

「東家のイギリス風の洋間には、適度の冷房がきき、ガラス戸を隔てた夏の朝の庭には、カンナやジェラニウムが黄と赤の燃えるような色を輝かせていたが、室内温度は十七、八度の涼しさであった。」(四卷二七章三五九頁)

とある。洋間で東は薄いガウンを羽織って新聞を読み、クリスタル・

ガラスの紅茶碗に佐枝子が食後の冷茶を注ぐ優雅な生活が営まれた。夜は「芦屋川の山手にある二階の書斎は、夜になると冷房をきった方が、自然の涼しい風が吹き込んで来る」(四卷二七章三七八頁)ような環境で、冬はストーヴが用いられた(二卷一〇章一二一頁)。

『新修芦屋市史』(昭和四十六年)は、芦屋川周辺の住宅地開発は昭和初年ごろに飽和状態となったとする。東邸も、芦屋川駅ができた大正九年に近い、家が建て込まない早期の建設とすれば、一蔵を明治一桁の生まれとして、洛北大学附属医院院長であったと思われる五十歳頃に構えた邸宅と考えてみたい。松風山荘住宅地のほか、昭和四年(一九二九)土地区画整理の計画を認可され、芦屋では有名な「六麓荘」が建設され、昭和十五年(一九四〇)の市制実施で芦屋市が誕生する。

(二) 第一外科・名誉教授、滝村恭輔邸(阪急・御影駅、神戸市東灘区)

浪速大学第一外科教授として東の前任者である滝村恭輔名誉教授は「日本外科学会の大御所的存在」で、日本学士院会員、文化勲章を受章し、七十七歳を祝う喜寿の会を「新大阪ホテル」で開いた。「新大阪ホテル」は仮名ではなく実在のホテルであり、リーガロイヤルホテルの前身である。中之島の渡辺橋南詰めの朝日ビルディング西側に、昭和十年(一九三五)、政財界をあげて、当時「豪壮なベネチアンゴシック式の日本最大のホテル建築」を謳って建設された。滝村は、

「新大阪ホテルの三階大広間には、浪速大学名誉教授、滝村恭輔の喜寿の会を祝う各界の名士たちが、次々と集まっていた。大阪近郊の国立大学の学長、医学部長はもちろん、知事、市長、商工会議所会頭をはじめ、有名財界人、大阪選出の衆、参院議員などが、殆ど顔を見せている。」(一巻六章三六四頁)

という実力者であり、物語後半でも「八十歳で第一線を退いていても今なお外科学界に隠然たる力」をもっていた。喜寿の会が催された昭和三十八年から七十七歳を引けば、明治十九年(一八八六)の生まれとなる。喜寿の会での鵜飼の挨拶によると、滝村は昭和十六年(一九四一)頃に医学部長をつとめている。この頃、滝村は五十五歳前後の仕事盛りだったことになる。

日本医学会副会長でもある滝村に、財前は学会会議選に立候補する挨拶に向かう。滝村邸は阪急御影駅に近く、「御影駅から山手に向う坂道」を上った(四卷二五章二一六頁)。

「坂を上り詰めた松林の間に、白壁の長い塀が見え、京瓦を葺いた数寄屋風の家が滝村邸であった。門のベルを押すと、正門脇のくぐり戸が開き、老婢が顔を出した。」(同前)

財前が訪れると茶室に通される。

「八十歳で第一線を退いていても今なお外科学界に隠然たる力を持ち、平常は来客も多い滝村邸であるが、日曜日の朝だけは、茶室に坐ってお茶をたてていることをちゃんと聞き調べて来ているのだった。老婢の案内で敷石伝いに中庭を通り、茶室の蹲で手と口を漱ぎ、躡口から茶室へ入って黙礼した。お点前の最中である滝村は、手を止めず、見事な茶筌捌きでお茶をたて、正座した財前の前に茶碗をおき、はじめて口を開いた。」(同前二一七頁)

東の邸宅がイギリス風の洋館であるのに対して、滝村の家は和風で数寄屋風の豪邸である。財前に茶をすすめ、「織部の茶碗」で滝村も茶を喫した。滝村の夫人は「謡いの会」に出かけて留守であり、「順調に医学界の頂点にまで登り詰めた人間」(同前二二〇頁)である滝村は、西洋医学を学ぶとともに、茶道や能楽など古典文化の素養を、又一が主張する町医者 of 道楽とも異なる形で身につけた、名家の出身をおわせる。

戦前から御影や隣の住吉には、政財界の大物が居宅を構えた。御影は、朝日新聞社を創設した村山龍平(一八五〇～一九三三)が住み、そのコレクションを公開する香雪美術館も知られる。同地の村山の居宅は重要文化財に指定された。滝村の茶の湯には、香雪を号した村山のイメージも投影されるかもしれない。名前も比較すると、「滝」の字に竜(龍)があり、どちらも「村」の字が入っている。新聞社に勤めた山崎にとって御影には、村山のイメージが強かった気がする。

「白い巨塔」で、東が近畿労災病院院長の就任に援助を頼んだ日東レーヨンの池沢社長の邸宅も、御影の山手にあった。池沢の弟の池沢正憲衆議院議員は「医師出身で、医師会を地盤にして出ている医系議員」であり、東京都医師会役員から衆議院に当選した。(一卷三章二五五、二五六頁、正憲の名は一卷五章二九六頁)。政子が、同じ未生流の役員として社長夫人と知り合いで、華道やお茶、書道、謡の会から有名な俳優まで招待するパーティを、夫人が「春秋に一回ずつ、御影の宏壮なお宅で」開いた(同前二六一頁)。

御影の近隣も裕福であり、岡本村には、明治四十二年(一九〇九)に大谷光瑞の二楽荘本館が竣成し、住吉村には、西園寺公望の実弟で住友本家を継いで吉左衛門を名のった春翠こと、十五代当主の住友友純(一八六五～一九二六)が大正十四年(一九二五)に本邸を移した。また、「大阪府多額納税者」(『財界人物選集』一九三九年)とされる岸本海運の岸本五兵衛の別邸(本邸は大阪市西区)も住吉にあった。岸本は彩星童人を号して、世界の玩具や民俗資料の大蒐集家としても知られる。²³ 滝村もこうした大阪の名門につながる家系だろう。御影や住吉村など財政的に豊かで、神戸市との合併に消極的だったが、昭和二十五年(一九五〇)に合併してできたのが神戸市東灘区である。

(三) 病理学・大河内教授邸(旧国鉄高槻駅、高槻市)

大河内教授は、学士院恩賜賞を受賞した病理学者であり、前医学部

長をつとめ、誤診裁判では財前が「医師としての注意義務を怠った」と証言する厳正無比の学者である。臨床を代表する第一外科教授の住宅が阪急神戸線の高級住宅地に並ぶのに対し、その住まいは、旧国鉄（現JR）の高槻駅近くにある。自宅の前に、医学部旧館の研究室に大河内の徹底した学究的姿勢を確認しておきたい。

「広い部屋であったが、窓と扉だけを除き、壁面一杯に書棚が並び、病理学関係の原書や学会誌、病理組織標本のスライドがぎっしり埋まり、それでも入りきらない書籍が、床に積み上げられている。待っていてくれ給えといわれても、財前の部屋のように応接セットがあるわけがなく、大河内教授自身の坐る椅子しか置いていない。まるで部屋へ入って来た外来者に長く話し込まれるのを拒絶し、自分の城を堅持するような気配を感じ取られる。」（四卷二八章四八一頁）

高槻の住まいであるが、第二外科の今津教授が日曜の午後、大河内を訪れる。

「国鉄の高槻駅で降りると、第二外科の今津教授は、改札口を出、舗装された道を東に向って歩いた。郊外の商店らしく、ひっそりとした店構えが並んでいたが、そこを通り越すと人通りが少なくなかった。」（二卷九章五一頁）

旧国鉄高槻駅の東には、昭和二年に大阪高等医学専門学校として設立され、旧制大学を経て昭和二十七年に新制大学となり、昭和二十九年に大学院を設立した大阪医科大学があるが、山崎はそれには触れていない。商店街を抜けた先に大河内宅がある。

「表通りから脇道へ入り込んだところに、板塀が反り、軒先の瓦がずり落ちそうになった大河内家の家が見えた。学士院恩賜賞受賞の著名な学者の家とは見えぬ質素なたたずまいであった。」（同前）

家に入ると、

「今津は土間にたつて玄関を見廻した。上り框の板の間は節だらけで反り、続きの畳も褐色に焼け、殺風景な寒々しさであった。」（中略）

歩く度に床板が軋むような廊下を通って、奥座敷へ行くと、そこが書斎であった。十畳程の日本間に大きな書斎机を置き、壁際には寸分の隙間もないほど書棚をめぐらせ、一目で畳の窪みが眼につくほど、本の重みがかかっていた。」（同前五二頁）

求道者の棲まう巖窟のような研究一筋の学者らしい室内である。財前支持の寄託の医師会長である岩田重吉と鍋島も大河内を訪問する

が、荒廃した家屋にしか映らない。

「岩田と鍋島は、郊外の夜道を三十分余り、医学部の名簿を頼りに大河内の家を探し廻り、表通りから十メートル程入ったやつと中型の車が通れる小道の奥に、大河内と記された表札を探し当てた。(中略)」

岩田は車の窓から首を出し、もう一度、薄暗い門燈に照らされた表札を確かめてから車を降りた。鍋島も続いて降り、夜目にも解る風雨に曝されて反りかえった板塀を眺め、

「聞きしにまさる荒れ方ですな、この調子では、研究室と同じように玄関先に『面会禁止』の札を貼り出しているのやないでしような」(中略)

薄暗い玄関の二畳は、床板が隙いているのか、畳の下から微臭い冷気が這い上り、岩田と鍋島は、脱いだオーバーを膝もとへ寄せ、肩をつぼめた。(二巻十章一七一頁)

大河内とも似た学究肌の菊川の家も、金沢市上百々女町三丁目(現・石引町)の平家建てで、奉職する金沢大学の医学部は「古めかしい土塀と、厳しい武家門の多い屋敷町」から眺められたが(二巻八章一〇七頁)、高槻もキリシタン大名・高山右近が城を構え、永井家三万六千石の城下町であった。武士の禁欲的で旧道的な生き方を、山崎はこの孤高の医学者に投射したのかもしれない。大河内という公家風の姓も品格がただよう。

(四) 形成外科・野坂教授邸(南海電鉄・諏訪ノ森駅、堺市)

第一外科や大河内の住まいが大阪市の北側にあるのに対して、南郊に居を構えるのが、第一外科後任教授専攻の予備委員会にも参加した形成外科教授の野坂である。財前の三年先輩で(一卷七章三九七頁)、鵜飼と同級の岩田は野坂の「十三歳も先輩」となるので(二巻九章九七頁)、教授選時で四十七歳となる。

野坂の住む諏訪ノ森も含めて堺市浜寺一帯は、大阪湾に臨む白砂青松の景勝地で、浜寺公園は府立最初の公園に指定され、水練学校も有名である。明治中期、南海電気鉄道が開通して住宅地として開け、芦屋などに先行して、船場の富商らの有数の高級住宅地となった。昭和九年(一九三四)の江戸川乱歩「黒蜥蜴」で、身代金に三十幾カラットのダイヤモンド「エジプトの星」を要求される大阪の大宝石商・岩瀬庄兵衛邸の所在地「大阪の南の郊外、南海電車沿線日町」も恐らく浜寺である。山崎の自宅も浜寺駅の東側にあり、相続した土地に家屋を建てたという。六甲山に新築したばかりの山荘と浜寺の自宅で「白い巨塔」は執筆された²⁴⁾。

財前を嫌う野坂は、皮膚科教授・乾や小児科教授・河合とともに、前任助教教授であった徳島大学・葛西教授を教授選で擁立する。当時、大阪から徳島に行くには、南海電車で和歌山に行きフェリーで渡るのが一般的で、野坂邸も南海沿線に設定されたのかもしれない。第二外科の今津が訪れたときの様子は次の通り。

「南海線の諏訪の森の改札口を出ると、今津は、灯りのついた駅前商店街を通り抜け、木枯らしの吹く郊外の小道を歩きながら、野坂との交渉の内容をもう一度、頭に思いうかべた。(中略)」

目じるしの歯科医院の角を折れ、五、六軒行ったところに、門燈に照らされた野坂の家が見つかった。生垣に囲まれた百五十坪程の敷地に、赤い屋根瓦の洋風の建物が見え、手狭で古びた大河内の住いとは、格段の相違があった。今津は、そこに臨床の遣り手の少壮教授と、学士院恩賜賞まで受賞していながら、清貧に甘んじている基礎の長老教授との皮肉な対照を見るような思いで、門のバルを押した。」(二巻九章八一頁)

諏訪ノ森駅は、明治四十年(一九〇七)に南海の北浜寺駅として新設され、翌年に諏訪ノ森駅に改称した。大正八年(一九一九)、浜寺公園側に移転し、ステンドグラスを嵌めた駅舎を建てる。「木枯らしの吹く郊外の小道」を歩く距離感は、駅西側の海岸ではなく、山崎の自宅のある東側かもしれない。「赤い屋根瓦の洋風の建物」はスパニッシュ風で敷地も百五十坪程だが、庭が二百五十坪ある財前邸と比較すれば、野坂が敵愾心を抱く気持も納得できる。

「玄関脇の洋館に灯りがつき、奥からラジオの音が聞こえてい

た。(中略)

玄関へ案内し、奥へ引っ込むと、丹前を着た野坂が姿を見せた。

「これはまた、突然、どうしたのです、まあ、ともかくお上がり下さい」

玄関脇の応接間の扉^{ドア}を開けた。居間としても使っているらしく、部屋の中にストーヴが温かく燃え、灰皿に吸殻が溜まっていた。」(同前八二頁)

近代住宅では、日常生活を行う和風の母屋の玄関脇に洋風の応接間を付設させた間取りがあり、野坂邸もそうだったのであろう。灰皿の吸殻は、応接間に籠もって教授選を思案し苛立っている様子であり、灯りを消して暗闇で計略を巡らせていたように読める。昭和四十年頃から浜寺では、堺泉北臨海工業地帯の埋め立てがはじまり、景勝地や高級住宅地の面影が薄れていく。場面は、地域が変貌する直前の諏訪ノ森の高級住宅を描写する。

なお、浜寺には近畿医大の増富教授の家もあった(四巻二五章二四五頁)。「白い巨塔」で浪速大学関係者が登場しないのが東大阪方面であり、この地域を代表する大学が近畿医大である。「東大阪市の住宅地が建ち並んだ一角に、ぽつんと千五百坪程の空地があり、そこに近畿医大附属病院の分院が新設されるに当たって、盛大な地鎮祭が行なわれていた。」とする分院は地下二階、地上六階で、学術会議会員選を

財前と争う「交通傷害専門」の重藤教授の「交通傷害センター」が予定されていた（以上五卷二九章九三～九四頁）。浪速大学医学部附属病院の増設工事は千五百坪に二億五千万円であったが、近畿医大の分院は「用地買収費一億五千万、建設設備費二億と、総計三億五千万円の資金」（同前九七頁）であった。

六、鵜飼学部長と美術コレクション

医学部長の鵜飼第一内科教授については、美術品コレクターとしての一面にも触れたい。

鵜飼は東の三歳年下で、教授選時は六十歳と考えられる。名は原作にないが、性格は豪放磊落で、「最近、俄に脚光を浴びて来た老人病のなかでも、高血圧、心臓病などの循環器障害の分野を特に専門」とし、「大阪の財界の長老格に多くの知己を持ち、その方面にも隠れた力を持っていた」とされる。浪速大学出身だが、東一蔵が鵜飼の父の先輩であったことで東を引き立てた（以上一巻一章二三頁）。姓が暗示する鵜飼のように老獪に部下を使って世渡りし、学長ポストも視野に行動する。鵜飼夫人も、佐枝子や三知代と同じ「聖和女学院」の出身で、学院祭を兼ねた同窓会総会の世話役としてバザーを佐枝子が担当したとき、三人は言葉を交わした（四卷二四章一一四頁）。

鵜飼の自宅は宝塚で、旧国鉄宝塚駅もあるが、第一外科の教授たち

が阪急神戸線に住んでいることから、鵜飼宅にも阪急沿線のイメージがある。阪急の場合、宝塚駅には宝塚線とは別に今津線が乗り入れており、帰宅ルートの二通りの選択肢も、表の豪放な顔とは異なる鵜飼の複雑な性格を暗示するように感じられる。ただ、財前や東、滝村の住居が高級住宅地であるのに比べ、宝塚は、大劇場や遊園地のルナ・パークなど遊戯施設を構えた新興の温泉地として発達し、庶民性、通俗性も備えた住宅地であった。

ドイツから伊丹空港に帰国した財前は、誤診で訴えられていることから鵜飼邸に急行する。

「松林に挟まれた坂道を上り、左に折れると、鵜飼邸であった。大谷石の高い門柱の前で車を降りると、又一は門のベルを押した。玄関の方に灯りがつき、女中が切戸を開けた。（中略）」

十二、三畳の洋風の応接間は、豪華な応接セットと飾り棚が置かれ、飾り棚の横に教授選の前に、財前から贈った染井画伯の絵が掲げられていた。（三卷一八章一四六頁）

東邸の二十畳の広さとマントル・ピースのある応接間に及ばないが、豪邸に違いはない。玄関が切り戸で、応接間が洋風と断るのは、全体が和風建築であることを暗示する。作品後半で呼び出された財前は、鵜飼邸をさらに観察する。

「十二、三畳程の応接間には、高価な古美術品や号何十万円もする画家の絵が掲げられ、財前の家とは比ぶべくもない豪奢さであった。財前は飾り棚の上に掲げられているパリのノートルダム寺院の絵に眼を止めた。三年前の教授選の時、財前が鵜飼に贈った絵で、当時、号八万円ぐらいだった染井青児画伯の絵が、芸術院会員になった今、二十万近くにはね上がっている——、自分も、学術会議会員ともなれば、今以上に医学者としての地位が上がるのだ、咽喉^{のど}もとから膨らんで来るような笑いをその絵に投げかけた。」（五卷三〇章八五頁）。

「パリのノートルダム寺院の絵」は、鵜飼の患者の経営する「心斎橋画廊」での「染井青児滞欧作品展」に出品されたものである。画廊の広さは三十坪ほどで、「外から見通しになっている正面の大きなガラス扉^と」があり、モデルは、当時の大阪市南区（現・中央区）東清水町二七の「島之内画廊」だったという。²⁵ 東清水町（現・東心斎橋）は、大丸心斎橋店の南側にある東西の通りで、心斎橋筋から一丁半東に入ると、かつて吉本興業の文芸部があり、織田作之助「世相」の「バーダイス」や、「白い巨塔」で東と鵜飼が大学病院新築の作戦を練った「バー・シロー」も付近に設定されている。

画廊の二室目にあったノートルダムを描いた三号の油彩画を熱心に鵜飼が見ていたことから、財前が義父の財力を使い、教授選で味方にするため贈ったものである（一卷三章一四一頁）。三号のカンヴァス

は、風景サイズならば二七・三×一九・〇センチぐらいの小さなものだが、財前は相場で号八万円の作品を、三号二四万を二〇万円に値切って購入する。財前の本給も里見の五万六千円と同じぐらいと思われるので、四ヶ月分近い金額である。

染井青児の名は、第二紀会結成に参加、大阪芸術大学の前身の浪速芸術大学教授となった鍋井克之（一八八八～一九六九）と、二科展で活躍した東郷青児（一八九七～一九七八）がモデルだろう。昭和三十二年、毎日新聞社主催で「ふりかえってみる関西洋画壇傑作展 小出楢重・佐伯祐三をめぐって」展が心斎橋・大丸百貨店において開催され、鍋井作品も出品されたほか、山崎の上司、井上靖は、鍋井や小出楢重、黒田重太郎らと信濃橋洋画研究所を設立した国枝金三（一八八六～一九四三）についての文章を残している。²⁷

さらに山崎の夫の杉本亀久雄（一九二〇～一九九二）も、毎日新聞大阪本社学芸部の美術記者であり、洋画家でもあった。杉本は、関西学院大学を出て毎日新聞に入社し、昭和二十五年の「モダンアート協会」結成に創立会員として参加している。²⁸ 山崎も画家に詳しかったはずである。「芸術院会員になった今、二〇万近くにはね上がっている」とするのも、昭和三十五年に東郷が日本芸術院会員になったことを踏まえるのだろうか。

画題や画風からは、染井のノートルダムは佐伯祐三（一八九八～一九二八）を思わせる。佐伯は先の「関西洋画壇傑作選」に二十八点が出品され、昭和三十三年（一九五八）にも大阪市立美術館で回顧展が

開かれ、「サンデー毎日」九月十五日号から「白い巨塔」の連載が開始された昭和三十八年には、十月一日から十三日まで心齋橋の大丸百貨店で八十二点もの作品を集めた「佐伯祐三展」(朝日新聞社主催)が開催されている。²⁹⁾「続 白い巨塔」連載中の昭和四十一年に杉本は毎日新聞社を退職し、画業に専念して同年に日動画廊で第一回個展を開いており、山崎は杉本も意識しただろうが、「やや抽象化され、褐色の絵具を厚く塗り重ねた絵」(一卷三章一四四頁)とあるのは、佐伯の画風に近いように感じる。

近年のテレビドラマでは、岡田准一主演「白い巨塔」で松重豊が演じる鵜飼の邸宅は美術品があふれ、学部長室には油彩画数点と書の額が掛けられていた。美術品の飾り方に全体の調和が欠けているのは原作では東邸であり、多くが贈答品のためとされるが、テレビドラマでは、調和の欠如を鵜飼邸や学部長室に演出する。しかし、テレビ映りを意識した演出のためか、ドラマの小道具に用いた作品の号数が三〇号(九〇・九×六五・二センチ)ぐらいあり、高価に過ぎて、公職にある鵜飼が貰うのは不自然である。又一が「お近付きのお名刺代り」(一卷四章二二八頁)というのも、原作の三号サイズが適切である。

三号の大きさを、さらにデリケートに解釈すれば、大作も出品されていたはずの個展で三号を熱心に眺めていたのは、奮発すればポケットマネーで買えるサイズとして、鵜飼が迷っていたためではなかったか。本給以外に、医学部長の職務手当は月一万六百元が付くほか(一卷三章九七頁)、「有力なつてや、紹介状を持って教授室で、特別診察

を受けた場合は、病院規定にない特診料と呼ばれるもの」(一卷三章一〇二頁)があり、平和製薬主催の開業医向けの講演会では五万円の講演料を受け取っている(四卷二五章二四五頁)。三号を購う財力は鵜飼にあったはずである。

また、画廊主より「絵は財産になります。お安くしときますからお買いになると得だ」と勧められた鵜飼は、「こんな絵が一号八万円もするのかね、どうも、わしには解らんよ、あつはつはつ」と財前に話しているが(一卷三章一四四頁)、画廊主や特診患者の財界人との交際から、美術品蒐集に目覚めていた可能性もある。

「白い巨塔」の外伝があつたとしたら、その後、鵜飼がどんなコレクションを形成したか想像できるかもしれない。たとえば、昭和三十七年(一九六二)、大阪大学医学部のあつた中之島四丁目に隣接する中之島三丁目、前衛美術団体「具体美術協会」の美術館「グタイピナコテカ」が開設された。そのリーダー吉原治良(一九〇五―一九七二)は、アーティストであるとともに吉原製油の社長をつとめる財界人であつた。東より三つ下の鵜飼は明治三十六年生まれとなり、明治三十八年生まれの吉原と年齢も近い。無論、架空の話だが、財界人に特診患者が多い鵜飼と吉原がつながつたと想像するのも面白い。

なお、財前の愛人のケイ子が住む西長堀のアパートのモデルは、昭和三十三年に日本住宅公団(現・都市再生機構)の造成した「西長堀アパート」であり、司馬遼太郎や石浜恒夫、森光子、野村克也が住んでいたことで知られる。その一階ロビーにモザイク壁画(現存)を制

作したのは吉原である。

鵜飼邸に関連して、財前は「鵜飼医学部長の銀婚式を記念して書庫を贈る奉賀帳」を関係筋に回し、「開業医グループからは一口三万円乃至五万円、系列大学の教授クラスは一人一万円前後、製薬会社は一口十万円程度」を募って、約三百万円を集めている（二巻十四章三五六頁）。里見の月給で換算すると三十数ヶ月分であり、現代の一千万円ぐらいに相当するだろうか。贈呈される「書庫」は鵜飼邸に新築する計画であったと考えたい。（文中敬称略、以下次号）

注

- (1) 山崎豊子『白い巨塔』を書き終えて「サンデー毎日」一九六五年六月二十日、山崎豊子『大阪づくし 私の産声 山崎豊子自作を語る2』所収、新潮社、二〇〇九年。山崎豊子「あとがき」『続 白い巨塔』新潮文庫、昭和五十三年五月。山崎豊子「少年の遺言」『山崎豊子全作品』第六巻月報、一九八五年十二月、新潮社、『大阪づくし 私の産声 山崎豊子自作を語る2』再録
- (2) 新潮社は、昭和四十年に『白い巨塔』、昭和四十四年に『続 白い巨塔』を刊行する。文庫化は、昭和五十三年に『白い巨塔』（上下二冊、全二十一章）と『続 白い巨塔』（二冊、全十二章）の形で刊行し、平成五年に『続 白い巨塔』を下巻にまとめ、正編と続編を『白い巨塔』の題名で統一した『白い巨塔』上・中・下の三巻本を刊行する。平成六年、正続を一冊に収めた単行本の愛蔵版『白い巨塔』が出され、平成十四年、テレビドラマ化を機に全五冊三十三章の文庫版が刊行された。別に、『山崎豊子全作品』（一九八五年）、『山崎豊子全集』（二〇〇四年、共に新潮社）などにも収録される。
- (3) 前註『白い巨塔』を書き終えて「

- (4) 山崎豊子「取材しないで書いた小説」『山崎豊子全作品』第三巻月報、一九八五年十月。山崎豊子「調査癖」「新潮」一九六五年七月、ともに『大阪づくし 私の産声 山崎豊子自作を語る2』に再録
- (5) 野上孝子『山崎豊子先生の素顔』文藝春秋、二〇一五年
- (6) 第四部 社会派小説家の誕生 作品ガイド2『山崎豊子読本』（新潮文庫編輯部編、二〇一八年）。『山崎豊子スペシャル・ガイドブック』（二〇一五年、新潮社）を文庫化にあたり再編集し改題したもの。
- (7) 前註、野上孝子『山崎豊子先生の素顔』
- (8) 前註、野上孝子『山崎豊子先生の素顔』
- (9) 山崎豊子「少年の遺言」、前註『大阪づくし 私の産声 山崎豊子自作を語る2』所収
- (10) 升本喜年『田宮二郎、壮絶テレビ！ いざ帰りなん、映画黄金の刻へ』清流出版、二〇〇七年ほか。田宮が自殺したのは、ドラマの放送を残り二話残した昭和五十三年十二月二十八日だった。
- (11) 佐藤慶、村上弘明、キム・ミョンミン主演についてはウィキペディア「白い巨塔」参照。他は市販DVD、各局ホームページ等参照。
- (12) 『大阪現代人名辞書』文明社、一九一三年
- (13) 高安吸江「船を大川に浮べて」『京阪百話』所収、坪内士行、木谷蓬吟、食満南北、高谷伸共編、日東書院発行、一九三三年ほか
- (14) 前註、野上孝子『山崎豊子先生の素顔』
- (15) なお、学術会議選挙の段階で、里見の実兄の里見清一に、洛北大学講師から三重県下の大学に転任して十七年経つ旧友からきた手紙には、月給が十三万円と記されている（四巻二八章四六〇頁）。
- (16) 橋爪節也監修・執筆『写真アルバム 大阪市の昭和』（樹林社、二〇一八年）に、法円坂住宅の南側にある寺山団地の昭和三十年代の子供たちの写真が二点掲載されており（同書二六ページ）、当時の公団住宅の子供たちの様子が分かる。
- (17) 『大阪現代人名辞書』文明社、一九一三年
- (18) 福山琢磨編・植村朝音監修『直木三十五入門 こんなおもしろい人

だった』新風書房、平成十七年に所収。ほか青空文庫

- (19) 第二十二章(「続 白い巨塔」以降では、柳原のアパートが東淀川(大阪市東淀川区)であること(五卷三二章二六九頁)など、脇役たちの設定が、さらに具体的になっている。

- (20) 前註、山崎豊子「調査癖」

- (21) 山本ゆかり「阿部元太郎による近代郊外住宅地開発―松風山荘住宅地を事例として―」「日本建築学会計画系論文集」第六一八号、二〇〇七年

- (22) 「モダニズム再考 二楽荘と大谷探検隊」図録、芦屋市立博物館、一九九九年

- (23) 中尾徳仁「岸本五兵衛に関する覚書(その1)」「天理参考館報」第三二二号、二〇一八年度

- (24) 前註、野上孝子『山崎豊子先生の素顔』

- (25) 現在、心斎橋筋で小大丸画廊も経営する心斎橋画材の白井良司氏の御教示による。画廊主より、小説のモデルとなったことを直接聞いたという。

- (26) 「ふりかえって見る関西洋画壇傑作展画集 小出栖重・佐伯祐三をめぐって」毎日新聞社・大阪大丸

- (27) 井上靖「国枝金三」『藝術新潮』四一八、昭和二十八年、井上靖『忘れぬ芸術家たち』新潮文庫、一九八六年に収録

- (28) 東京文化財研究所アーカイヴス

- (29) 橋爪節也編「佐伯祐三関係・主要展覧会記録」「生誕一〇〇年 佐伯祐三展」図録、大阪市立近代美術館建設準備室、一九九八年

- (30) 執筆のための取材時の話として大学や病院に詳しい「サンデー毎日」編集者によると、百万円の「特診料」を包む患者もいたという。
前註、野上孝子『山崎豊子先生の素顔』